



新  
庚申講  
一



遠 13  
1709  
1





















小げくおくだいひは起る念ごとくや  
ふも長玉さきこきえがくちりけり  
いやどちとふくおこいなるま  
るづまうくちりくちりくちり  
なりやふおのりおきしむ様ぐや  
はよもわしきざあこのくちり  
さきこきいのもよがむ様ぐや  
くちりくちりくちりくちり  
くちりくちりくちりくちり  
くちりくちりくちりくちり

ひきぬのてけりてきいそく  
ちりくちりくちりくちり  
小げくおくだいひは起る念ごとく  
ふも長玉さきこきえがくちり  
いやどちとふくおこいなるま  
るづまうくちりくちりくちり  
なりやふおのりおきしむ様ぐや  
はよもわしきざあこのくちり  
さきこきいのもよがむ様ぐや  
くちりくちりくちりくちり  
くちりくちりくちりくちり  
くちりくちりくちりくちり

果

木



あゝ胡もたたりなア人せよれハ総冊しり  
議のいりこがけとてはあふんでいり  
が中れはけくそのどやふるそんが  
いやどや人のあのみわたりと

嵐

次之の石性しく木と想よ刊けの定丁  
どのしよせしきつてられぬ内子  
かしてそ芥をとうとてかめ  
のさしそもいへた度々も花や

あゝがしりやのあのみ又  
いし様はあそこのきるれ  
りまそしき評かひし又も  
まいが病強しいもあふ  
て花をわしめぬのあひ  
りあといよみ強の勇か  
むごんやそん心か  
どしてたあしりあ  
かけりし時何をうし



候









とらふをせぬてな創りやう  
ばしやうとらふて

氏

ふかしく〜 木の枝〜

おしく〜

とらふ

自

し〜

〜

エ〜

お〜

お〜

お〜

お〜

お〜

お〜

お〜



かきまゝにこぼし傳ふまゝぬれつゝまゝに  
むくしとやま

いんま

おのゝしとまきこま舟屋化まぬれり  
那ふれりしと 丁稚まゝや又も免るや

はまか

春のまゝに 諸もまゝつゝ  
春のまゝに 諸もまゝつゝ

深き店つゝ 折候多し物もあま  
深き店つゝ 折候多し物もあま

抑揚 びんとよこつゝ

せのびならむヨリハ 那抑本屋りく  
うしといふまゝの屋り  
今も大神のまゝつゝ  
あつていけいけいけ  
つゝいりや  
ともし傳ふ屋ハ

梅友の子の皮

少敷のらとふつ汁の母  
く 梅をさし











さしつかさうさしよもめんじやうもね合率  
のそんぶがせいの魚しおるじよめで大精業  
でおんじやうしんを結らぐえ布を揚を  
海しんらのおはしあわぐり今海は  
をさつやぶの下れはる風もかたりしお  
くそのうなぐさそせ山いじよじよの衣川で  
鮭をさうりががな川の鮭をさる  
蘇はるる屋もあまらぬね又月人  
んなんどのふちるおいのまをハ名子

しおあお修をゆほくして月りし  
をいさうかぬよめでめんじやうしんはる  
たぐえてゆもてやその山はあぐり  
よもめんじやうしんねね又おの花は  
しんあいはんう何の花かう咲ゆくの  
のふでら樹の花かう咲ゆが樹の何か  
咲ゆれ

山子神

ねんをぬ所くいんをかじぶ小柳軒



實を事くしききたたのきぶ親父所へ  
 あり小抄切を賞とのそんは紐をきき  
 うししかさゆふとふとらとぎも一  
 賞ももまじむい何くふりくも紐を  
 きてしらんともながけおしそり女  
 人との親がらんちやらんをたんで  
 しがふも笑しくしく親任んまの  
 抄切のおくものまこと親任太の口を  
 のぐりくくことこののらとて今

ちしとらまををんせんまらあや  
 ちふ年してをるまおしとや

思あまの

計りぬるの桶ふまはゆあのお島よあゆこの  
 ちふ女前をりけきゆあははら碎の  
 ちびんよゆふゆをてあまはむし花よ  
 ちふよはごてまき子目しおなゆけはあまの  
 ちふよしとんごあまのゆりゆりゆけ  
 のうつくしもののがば梅一枝おれくあづま











